

第17期  
「京都教師塾」

令和4年11月12日

## 学びの広場

November

京都教師塾通信

No.3

京都市教育委員会 教員養成支援室

### 第2回京都市教育学講座 京都市総合教育センター 東良 雅人 副所長 「主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり～一人一人の子どもを主語にするために」



第2回は、「授業づくり」をテーマにした講座でした。東良先生はお話の冒頭で、「動いているものは動いているものにはしか見えない」と述べられ、空を飛ぶツバメや線路上を走る線路を例に挙げながら、子どもの成長についていくためには、教師が動き続けなければならないことを説かれました。続いて、情報化をはじめ、予測困難な形で変化し続ける社会について概説する中で、将来的に求められる人間の能力（「問題発見力」「革新性」等）や学習のスタイル（「主体性・対話・過程の重視」等）が変化してきている

ことを話されました。ご自身の専門である美術科における具体的な実践事例の映像や写真を示しながら、「その学びがなぜ大切なのか、その根拠にきちんと向き合うこと」や「教科等の本質を見極めること」を授業づくりにおいて大切にすることで、子どもたちの主体的・対話的で深い学びが促進され、そして、よりよい社会や人生を創り出すための多面的な「見方・考え方」が育まれるということを分かりやすく教えていただきました。

分散会では、「子どもの主体性を生かした学びをデザインするためには、どうすればよいのか」「学習のねらいを子どもと共有するための手立てとは何か」など、それぞれの課題意識を大切にしながら、活発に話し合う姿が見られました。



### 第1回特別講座 講師:京都市教育委員会学校指導課 島本 由紀 参与 「地域とともに育む京都の教育 ～番組小学校の創設と京都ならではの教育活動～」



特別講座は、今日的な教育課題についての理解を深めるための講座で、京都市の教員採用内定者の研修にも位置付けられています。第1回は京都市教育委員会学校指導課の島本由紀参与に、地域と共に歩んできた京都の教育について話していただきました。明治5年の「学制」発布に先立ち、京都では町衆の熱い思いによって、明治2年から番組小学校が設立され、「まちづくりは人づくりから」という理念の元、地域の力を生かした教育が実践されてきたということ、写真や年表といった様々な資料を示しながら解説されました。

社会が大きく変化する現代において、学校の教育課程が社会に開かれていることはとても大切です。また、京都には、人材、文化財、産業などの様々な面で、地域ごとの優れた特色があります。それらを学校の教育目標やカリキュラムとの整合性を検討しつつ、どのようにして教育のための資本として生かしていくか。学校と地域のよりよい協働の在り方について、これからも考えていきましょう。



## 仲間のレポートに学ぶ

### 第2回京都市教育学講座【講義】

「主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり

～一人一人の子どもを主語にするために～」を受講して

1組



主体的・対話的で深い学びについて、大学などでも学んでいるが、具体的な例などはほとんど見たことがなく、言葉を学んでいるだけであった。そのような中で、全体会では、今後、予測困難な時代に入っていく、自らも学び続けなければ子どもの姿をとらえることができないといった話を聞き、最初は不安に感じていた。しかし、実際の美術での生徒の様子から学びの過程を重視する授業であり、生徒と教員が学習を行う際に、ねらいを共有できた授業を知ることができ、自分の中で主体的・対話的で深い学びについてイメージをもつことができるようになった。その後の分散会では、学んだこと、取り組みたいこと、課題に感じることを話し合う中で、授業を行う際に非常に重要となることは、子どもの視点に立つことで子どもを理解しよう、知ろうとし続けることであると考えた。そして、このことは、授業を考え準備する際や、自分自身が課題であると考えていた学習のねらいをどのように子どもたちと共有するかを考えていく際に非常に重要となることなのだと気づくことができた。しかし、子どもの視点に立ち、理解することや、授業の準備に関してはゴールのないことである。そのため、教員である間、ずっと続けていくべきことであると考えた。また、授業の準備に関しては、全てを用意してしまうことで、ルールを引いた授業となり、主体的な授業とならないと考えた。そのため、授業の準備に大切なことは、内容をきっちりと決めるのではなく、子どもたちの様々な反応を考え、対応できるよう準備することなのではないかと考えた。これらのことから、子どもの視点を知り、理解をすること、授業を考え、準備していくことが大切であるが、今後、様々な変化が起こり、予測ができない時代において、教員自身も学び続け、子どもと同じように変化し続けていくことが重要であり、自分自身が今後取り組む課題であると感じ、考え続けていきたいと考えた。

今回の講義を通して、主体的で対話的な深い学びについてイメージをもつことができるようになったことは、大きな収穫ですね。その収穫の上に立ち、改めて大学での講義を「振り返って」みると、理論と実践が少しずつつながっていく新たな収穫を得られるかもしれません。「子どもを理解しよう、知ろうとし続けること」「教員自身も学び続け」「変化し続けていくこと」が、講義冒頭の「ツバメの話」にあった「まず自分が動くことが教育の前提」という東良先生の話とつながっていることに気づけば、それこそが今回の講義のねらいでもあり、みなさんがそのことを共有された証でもあると思います。



2組



3組



4組



5組



6組



7組



8組



子どもたちの今と未来のため、社会のあらゆる場で  
学びの力を京都市民自身を実践しましょう!



補講(11/1)の様子